



きむら あきこ 新連載

久しぶりに書いてみました。言い訳になってしまうのですが、昨年、手足の末梢神経障害が起きてしまう、CIDP という難病を発病してしまいました。長い時間一つの作業ができません。パソコン操作も同様です。ですので、復帰作ものんびりと。今できることを、今できるうちに……

かぞくのはなし

P311～

朴 希沙 新連載

【Not a サクセスストーリー、But a リアルストーリー】

世の中には様々な子育て本があるらしい。子育て本だけでなく Youtube、漫画、教材…今号から始める「コミュニティが育つ、子どもがいる暮らし」の連載では、根無し草のように親や家族からの援助が得られない私たち夫婦が、どのように周囲から助けを得られたり得られなかったりしながら子育てに取り組んでいるのか、そのリアルなお話を届けたいと思う。そして結果的に、子どもだけでなくむしろ私たち大人、そしてその所属するコミュニティが成長していく可能性に注目したい。つれづれなるままに試行錯誤の日々の暮らしをご紹介します。

コミュニティが育つ
子どものいる暮らし

P222～

野中 浩一

今年もこたつから出られない季節になってきた。異常気象という言葉には実感を持てるが、温暖化という言葉は私には夏の一時期を除いて実感が薄い。

島根の冬は寒い。今年は11月半ばにしてスタッドレスタイヤに替え、トランクにはスコップと毛布を入れて備えている。ガチガチ凸凹に凍った国道をオフロード感覚で運転する時期がやってくる。雪や氷で覆われる冬は危険を感じることも多く、運転が怖い。しかしほとんど雪が降らない稀な年には少し物足りなさを感じるから不思議である。

そんな降雪地域に住み続け、日々仕事に出かけられることは有り難い。早朝から除雪作業をし、氷解剤を散布してくれる土建会社や作業員さんのおかげであり、道路整備の行政サービスがあってこそである。このような従来の「当たり前」がいつまで当たり前であり続けられるのだろうか。ふと思う。

「島根の中山間地から Work as Life」

P301～

畑中美穂



女が3人揃うとさわがしい。久しぶりに帰省して母と妹と話をしている時のこと。「あっ！！ なんと生意気な～！！」

ふと見れば、妹が母のネイルケアをしたとのこと、中年ふたりと比べて明らかにきれいな手の母は、ぴかっと光る爪を恥ずかしそうに前に差し出して、まんざらでもなくうふふと笑う。若い頃から化粧っ気もなかった母である、大いに驚いた。よかったね、お母さんにこのようなきらきらしたことがあって、私はうれしい。

一語一絵

P289～

二階堂哲

(小幡知史・渡辺修宏・二階堂哲)

第1、2回と、渡辺さんの半生と、対人援助実践をリポートした一冊についてご紹介させていただきました。

今回は小幡さんより、対人援助実践に関する振り返りと、ジレンマを打開するヒントをくれた一冊をご紹介させていただきました。

第4回目の今回は、二階堂より特別支援学校で働くための指針となっている2冊の本を紹介させていただきます。どうぞよろしくお願ひ申し上げます。

対人援助実践をリポートする

この一冊

P294～

米津達也

あまり実感がなかったが、私が暮らす滋賀では、琵琶湖の水位が下がり続けている。このままいくと取水制限で、いずれ生活に影響が出るかも知れない。

そんな中、湖底に沈んでいた坂本城の石垣跡が水位低下で27年ぶりに姿を現した、とニュースになった。歴史ファンの年寄りに交じって見物した。頼んでもいないのに、講釈してくれる爺さんがいた。

湖上の反対に見えたであろう安土城。そして、振り返れば比叡山延暦寺。歴史の面白さを感じる秋。

川下の風景

P287～

高井裕二

先日、20代後半の先生が終電に間に合わせるためにスマートフォンのアラームを設定されてました。「なんかカラータイマーみたいですね」とコメントしたところ、ポカんとされ、「カラータイマーってなんですか？」と返されました。なるほど。確かに今のシン・ウルトラマンにはカラータイマーがないですもんね。研修でのネタが一つ増えました。

福祉教育への挑戦

P292～

本間 毅

私は今年の7月で64歳になりましたが、これまで特に節制もせず気が向いたとき

にベンチ・プレスをする程度で病氣や怪我とは縁遠い人生を過ごしてきました。生まれつき体が丈夫で運が良かったのでしょう。そんな私も、昨年末から血圧が200/100mmHgまで上昇し、多発網膜裂孔（網膜に孔があくが痛みはなく、小さな黒点やクモの死骸のような網膜片が視野に漂います）や高脂血症など身体面の不調が続き、持病の花粉症と不眠も悪化しました。患者さんと役割を交代したのではなく、私の中で医師と患者の役割が錯綜する日々が始まったわけです。その誘因は、認知症高齢者の人格を貶めるマイクロアグレッションにありました。絶え間無く流れる言葉の中の良からぬものを見出し、修正する行動力より精神の流暢性が私には足りないのだと思います。自分に向けられた言葉ではないのにうんざりして罪悪感さえ憶える。マイクロアグレッション研究会訳の『日常生活に埋め込まれたマイクロアグレッション』には多くを学びました。

職場の理解を得て、勤務日数を減らしてストレスから離れ運動を習慣づけたところ、現在は降圧剤無しで起床時の血圧は100/70mmHgまで改善しました。でもストレスが近づくと忽ち血圧は跳ね上がり、その夜は飲酒量が増え睡眠も浅くなります。blood pressure（血圧）とはよく言ったもので、他に原因がない「本態性高血圧」では精神的なプレッシャーが血圧変動の原因にも結果にもなります。私の「研究者としての虚栄心」を尊重しながら併走してくれる「かかりつけ医」は、プレッシャーを調整してくれる精密で有り難い圧レギュレーターのような存在だと思いました。

「幾度となく会い、
語りあうことの意味」

P276～

河野 暁子

10月から新しい仕事に就きました。緊張しつつも楽しみにしていましたが、あまりにパソコン作業が多いことに驚きました。いくつものアカウントやパスワードが配られ、あっちのシステム、こっちのシステムというように、別々の箇所へ入力を求められました。入力方法は、配布されたマニュアルを参考にします。よく分かっていないまま作業をしていると、思わぬエラーが出てしまい、それ以上は進めません。

毎日確認する職場内の連絡事項も、すべて電子化されており、業務に必要な情報にたどり着くまで、マニュアルを開いて格闘します。メールや連絡事項のチェックをしているだけで、時間はどんどん過ぎていきます。まるで機械に私が消費されているようで、仕事を始めた当初は、げっそりしていました。

その一方、手書きで印鑑をつく書類も依然として残っていて、対面で確認しながら提出すると、とてもほっとするのです。シンプルなのが一番だなと思いました。

この世界で生きるあなたへ

～国境なき医師団の活動～

P284～

土元 哲平

2021年10月から11月まで、鹿児島県の硫黄島にフィールドワークに行ってきました。大阪から飛行機で1時間＋船で4時間と、遠いようで近い場所にあります。学校に毎日通いつつ島で過ごしていると、なんと、慢性的だと思っていた肩こりが治りました。子ども達と毎日走っていたからでしょうか。あるいは、PCに向き合う時間が減ったからでしょうか。大阪に戻ると再発したので、やはり今の生活習慣は見直さなければ、と思った次第でした。



キャリアと文化の心理学

P273～

玉村 文

今回は「子どもと感染症」をテーマに原稿を書きました。その後も入院こそしていませんが、子ども達は次々と風邪をひいて看病続き。気がついたら今回の原稿の締切に迫っていました。一人治ってもその次がくる、子どもが複数いると感染の怖さかと当たり前ですが、痛感します。そんな今回は、産休育休をどう過ごすかがテーマです。風邪の看病だけで終わらせない。

産休育休を休みとして使うのではなく、育児中ということを有効に使うと挑戦しています。

応援 母ちゃん！

P265～

川畑 隆

前号の「かけだ詩⑥」に載せた「テレビ番組の記憶の底(65歳以上限定版)」のなかで、『若い季節』の出演者の1人を「菅原進」と書きました。自分で書く時には何も思いませんでしたが、発行されたものを読むと「アレッ?! これってビリーバンバンの弟のほうじゃないの?!」と気づきました。『若い季節』に出ていたのは「菅原謙二」でした。

そこに『まぼろし探偵』はラジオだったか?とも書きましたが、たしかにラジオでした。その当時『まぼろし探偵』が一番好きでしたが、その声はたしか沼田曜一でした（「一番好き」と書いた時点で、『赤胴鈴之助』を思い出しました。大事な番組を抜かしていました）。

なぜ『まぼろし探偵』がラジオだったと思いついたか。「今日がお誕生日のお友だち」を紹介する番組のコーナーで、「かわばたかきちゃん、5歳」というお姉さんの声がラジオから流れました。母親がハガキを出してくれていたのです。自分の名前が耳に届いてとても不思議な気持ちになったのを覚えています。そして、その番組の前に聴いていたのが、たしかに『まぼろし探偵』でした。

かけだ詩

P260～

原田 希

毎年12月は地域の若妻会でクリスマス会をやっています。ささやかな金額でプレゼント交換もあり、仲間が喜ぶ顔を想像して真剣に選びます。自分よりも子どもや親が優先の世代、ささやかでも「私」あてにプレゼントがある！のはみんなウキウキだと思います。

以前、新しい人が会に入った時に、自己紹介ではなく、他己紹介をやりました。仲間が「私」を解説＝紹介してくれるくすぐったいものでしたが、照れながらも全員が仲間からギフトをもらった気分になりました。ふいの言葉の贈り物もいいものです。

ね。コロナにより集まる回数は減っていますが、来年こそは少しずつ戻していけますように、と願います。

原田牧場 Note
P254～

工藤 芳幸

今回は2回分休載し、福祉職として社会人デビューした当時の出来事を振り返りながら執筆しました。20年分程度は仕事の経験を積んで、その貯金で何とかやりくりできていたことも多かったと思われるのですが、新たな研究課題や新しい勤務校の大学生、新たに臨床現場で出会う子どもたちと関わる中で、最近はどうにも上手いかないことも出てきました。周囲の変化もありつつ、自分自身の見えない変化もあるのでしょうか。もう1度、物事の理解の方法や“わからないもの”と向き合う態度について考えてみようと思い始めたところです。

みちくさ言語療法
P256～

高名祐美

コロナ禍。研修会や会議、打ち合わせなどはオンライン開催となった。会場までの移動が不要なのありがたい。しかしながらどちらかというと、パソコンに関することは苦手なほうだ。当初は戸惑うことが多かったが、それなりにについていっている。こんなに毎日のように、パソコンの前に長時間座るとは思わなかった。苦手なことも、必要に迫られればなんとかできるものだと思う。もちろん自分ひとりの力でここまでできるようになったわけではない。できないこと、わからないことは、得意な人に力を貸してもらう。自分のまわりの人的資源に助けられてきた。必要な部分を援助してもらえば、自分でできるようになる。私はパソコンに関してはクライアントだと感じている。

さて2回続けて、自分の家族の話「母のものがたり」を書いた。今回からは現在の職場でのソーシャルワーク実践について書いていこうと思う。（「フリースクールのおけるSW実践」）

ふりーすくーーでのSW実践を考える
P250～

岡田隆介

編集部「「いったん連載を終わりにします」と連絡を入れた後、フォトショップで若かりし日の写真をイラスト化する作業にはまってしまい、それを使った原稿を書こうと思いついた。おかしな順序だが、パワポ好きにはよくある話だ、と思う。

次回（後半）の家族システムのイラスト4枚には相当な時間をかけた。「絵」の出来映えに一人悦に入っている、いつものごとく。

エア絵本
ビジュアル系子ども・家族の理解と支援
P48～

一宮 茂子

【逆縁の悲しみと寂しさの中で】

知人の娘の訃報を電話で受け、とりいそぎ仏壇のお参りに。娘は独身で豪華なマンション暮らし。知人は70代、娘は享年51歳という逆縁です。しばらく会わなかった知人は、ずいぶん足腰が衰え、動作がぎこちない。心労からか体重が10kg以上減少。知人の夫は80代で認知症もあり、デイサービスに通っていますが、老老介護です。今一番困っていることは、娘が住んでいたマンションを売却するための片付けのこと。これなら私は手助けできます。知人は娘を突然失い、いま、ここに娘がいない苦痛、亡くなった悲しみや寂しさ、葬儀や財産処分ですら上した息子夫婦への不信感、分かち合えないつらさが続いています。この苦痛から救われるひとつの道は、死者への思いを誰かよい聞き手に語ること、悲しみをともにし、つらさを訴え、死者への自責やつぐないの気持ちを分かち合うことだと、何かの本で読みました。以後、何かにつけて知人からの電話相談が増えました。私は言葉のキャッチボールが喪の作業になるならと喜んで引き受けた次第です。

生体肝移植ドナーをめぐる物語
P273～

松岡 園子

最近、来年に開催されるヤングケアラー関連の研修会での事例提供を依頼されることが多いです。すでに4件ほどいただ

いています。関心の高いテーマになってきているのですね。

来年2月ごろに出版される、ヤングケアラー関連書籍の一部も執筆させていただきました。自分の体験をシェアするたびに、ただ話すだけでなく、今、大変な思いをしている人たちに役立つこととは何なのか、支援者の人達に今、役立ててもらえることとは何かと、体験を振り返りながら考えさせられます。

統合失調症を患う母とともに
生きる子ども
P234～

杉江 太郎

児童福祉の現場で働いている杉江と言います。以前、職場内で「カフェドウスギエ」を運営していると書きました。コーヒーを定期購入することで、某メーカーのコーヒーマシンをレンタル出来たので、利用される方にとっては、マシン代の負担なく、1杯単位で、いつでも暖かいコーヒーが飲めると（おそらく）人気でした。人事異動に伴い、移転、リニューアルなどもありましたが、それなりに継続出来ていたので良かったのですが、この数か月で、小さな変化が続いたことで、たちまち在庫過多に陥ることとなりました。



その理由は2つあります。1つ目は、コーヒーを毎日飲まれていた方が、休まれたり、退職されたりしたことに伴い、そもそもの消費量が落ち込んだことです。2つ目は、新型コロナウイルスの影響で、コーヒーそのものが輸入されなかったようで、定期購入のタイミングで届かず、やむなく、近所のスーパーで購入してしまったことです。

在庫を抱えているにも関わらず、またコーヒーが届き、さらに在庫が増えるという

悪循環に耐えきれず、ついにマシンを購入する決断をして、定期購入を解約し、旧のマシンはお返ししました。カフェドウスギエ新装開店です。普段利用して下さっている方からは、マシン代をカンパするとのお声掛けも頂いたのですが、マシン代を受け取ってしまうと、所有権が杉江でなくなり、個人商店から合同会社になってしまい、もし人事異動などあれば、持ち出せなくなる可能性があるためお断りをしました。いや一商売は難しい。(ちなみに赤字です)

「余地」-相談業務を楽しむ方法- P230～

迫 共

衆議院選挙が行われました。私が住む浜松市では参議院議員の補欠選挙が1週間前だったので、あわせて期日前投票に。会場に着くと平日なのにずらりと人の列があり、しかも段差だらけ。車椅子の方が進めずに「帰る」とおっしゃっていて、投票前からがっかりした気分になってしまいました。

学生に聞くと、「投票には行かない」という人が圧倒的。どうやら「自分がまちがった選択をするのが怖い」と考える人が一定いるようです。責任回避のために選択を避けるというパターンのようです。

そこで、こんなことを話してみました。

「あのね、誰がどこに投票したかなんて、誰にも分からないんだよ。でも『20歳代の男性・女性の何割が投票に行ったか』はデータとして残る。むしろ政治家はそこに注目している。だからある年代・属性の人たちの大部分が投票に行くようになれば、その年代・属性の人たちのことを無視できなくなって、結果的にその人たちのことを考えた政策を作らざるを得なくなる。『投票に行かない』ということは、政治家に『私たちは無視してもらっていいです』と言ってるのと同じなんだよ」。

若い人たちの心に、少しでも響いてくれたらいいのですが…。

保育と社会福祉を漫画で学ぶ P226～

浅田 英輔

最近、クルマを新調した。MT がすきだ

が、8月まで乗っていたのはATだった。8月末に納車された(中古だからすぐました)のは、7年ぶりのマニュアル。自分で操ってる感がいいんだろうなと思う。メゴくてメゴくて、休みの日は一人で300キロドライブしたり、毎週洗車したりしています。

臨床のきれはし P139～

三浦 恵子

前回の執筆者短信では、ヘルプマークの取得を決心したこと、実際に着用してみると、1週間のうちに2回「邪魔」と通りすがりに吐き捨てられる経験をしたこと(ある時はエレベーターを駆け降りる人からすれ違いざまに、ある時は酒気を帯びた様子の男性から)、こうしたことがあることは聞いていたが、さすがに心に突き刺さったということを記載しました

「ヘルプマークをつけていることでかえって危険を感じられる場面もあり、今後どうするか考えている」と結びましたが、実際には現時点 R3.10.31 時点ではまだヘルプマークを付けています。



前回の執筆以降、ほぼ毎週介護帰省が重なり、週2回新幹線での往復をしながらか働くもありました。今回の介護帰省は、社会資源の調整など緻密な連携を行い、義母の病態にマッチした受入先を確保し、無事に義母を当該受入先に定着させるというかなりヘビーな課題があり、デスクワークはともかく、帰省の荷物を持って揺れや混雑のある交通機関での移動に不安を感じることも多かったからです。

しかしこの3か月、転倒時などに助けていただいた経験が多くありました。時には「気付くのが遅れてごめんなさいね」と言ってくださる方までおられました。また、支えていただく時に、不具合のある部分に配慮した支え方をしてくださる方もいらっしゃ

いました。感謝に尽きませんし、私ができることをきちんと社会にお返ししていこうと改めて感じました。次回の日赤救急員の更新はもう難しいかなと諦めていましたが、更新時期に備えて回復を目指そうという目標も出来ました。

義母の施設移行など様々に繁忙な日々が続き消耗していましたが、こうしたことがあると本当に勇気づけられます。

更生保護官署職員

(認定社会福祉士・認定精神保健福祉士)

現代社会を『関係性』という 観点から考える P217～

黒田 長宏

『対人援助』って、人だけがやることでもないんじゃないの？と思ったのは、ロボット掃除機のおかげで掃除をするようになったからである。だけどロボット掃除機を作ったのは人間ではある。

<https://konnankyuujotai.jimdofree.com/>

あぁ結婚 P194～

尾上明代

このマガジンでも何回か紹介したことのある、カナダのドラマセラピスト・ダンスムーブメントセラピストの Yehudit Silverman が制作し、数々の賞に輝いたドキュメンタリー映画「自死に隠された顔」(The Hidden Face of Suicide)の邦訳版を、助手の方と協力しながらこの夏に完成することができました。映画字幕の翻訳は初めてで、毎画面の限られた時間の中に入れる作業は大変でしたが、字数第一に意識をするのではなく、内容を正確に表現することに力を注ぎました。

この映画には、自死に関する遺族の語りや変容が含まれています。そして Yehudit の親族に起きた自死に関する彼女自身の探究と、自死遺族へのアドボケイトが実現されています。自死はさまざまな文化圏においてタブー視され、隠されなければいけないような社会の現状があり、それを破りたいという強い願いがこめられています。さらには、この映画自体が、芸術を使った研究(Arts-Based Research)と

もなっているのが特徴です。

Yehudit が運営する映画のサイトー
<https://tinyurl.com/ank9wbx9>
(収益金は遺族の自助グループに寄付されています。)

自死遺族についての学び、その変容にアートがどのように活用されるのか等に興味のある方、対人援助者の方、芸術を使った研究方法に興味がある方などにお薦めします。

ドラマセラピーの実践・手法・研究 P103

松村奈奈子

コロナが落ち着いて、秋の京都を楽しむ修学旅行生の姿を久しぶりに見かけるようになりました。そして、診察室に来る京都の高校生達も、信州や鹿児島へ修学旅行に。コロナ前は沖縄や海外に修学旅行に出かける高校生の話をよく聞きましたが、今は期間も短く、場所も近めになっているようです。それでも高校生の楽しそうな土産話を聞いていると、こちらも旅に出たくなりました。



そこで私も、ハケ岳高原にいったり京都北部に枝豆や栗を買いにいったりと、秋の大人の旅をちょっぴり楽しみました。

精神科医の思うこと P163~

柳 たかを

「対人援助」について思うこと

かつて10年間、私立の芸大でマンガを通じ学びを得て来た若者と共に過ごし、逆に私がいろいろ学ばせて頂きました。

学校での集団生活の中で起こるさまざまな問題、級友とのトラブルや進学問題、親の経済状態が子に及ぼす影響など、人の数だけ原因と症状がさまざまだと思います。

これを病気に仮定してみると、病気が治るというのはもとの健康状態・普通状態に戻ることですが、普通の健康な時に家にばかりいると、無性に外出して歩き回りたいくなります。旅(外出)はいつも小さな体験から大きな感動まで毎回変化に富んだ出来事に出くわしますが、考えてみるとわざわざ苦勞するために旅に出ているようにも思えます。そして何事もなくいつもの普通の生活に戻れることが幸せだと気づく。ところが幸か不幸か深刻な問題に直面した時はどうすればその場を乗り越えられるか分らず、焦りと疲労が積もり時間とともに怒りさえわいてきたりする、最悪です。混乱に心を占領されると冷静さを失い、わざわざ自分から危険(破滅)に飛び込んで行きかねない。そんな時に冷静な心を取り戻すアドバイスをくれる人がいて、そのアドバイザーが日頃から信頼している人だとより効果があるように思います。結局、病気と同じで薬で治るのではなく、薬(アドバイス)をキッカケにもともと持っている自己治癒力が覚醒して自分で自分の心体を元の普通の状態に戻していくということではないでしょうか。たいへんだったけど何とか帰れたというところでしょうね。

いろんなことが同じような「起承転結」のドラマを繰り返しているのかなと、マンガ家の私は考えてしまうのでした。

東成区の昭和 思い出ほろほろメモ P168~

小林茂

2015 年から対人援助マガジンに連載を投稿させていただきましたが、このところ本務の業務で大きな変化が重なり、少しの間連載をお休みさせていただくことにいたしました。

関係している幼稚園の園舎の建て替え、所属している大学の所属学部の新キャンパスへの引越し、内部での役務の増加、新型コロナ関連で仕事の段取りの変化と調整の綱渡りに、ついに音を上げてしまった次第です。

またしばらくしたら戻ってきますので、よろしく願いいたします。

対人支援 点描 当分休載

藤 信子

先日の週末に、私たちの研究会の開催する年1度の2日間のグループ体験(集団精神療法の研修)を実施できた。

できた、というのは感染状況によっては、会場が使用できなくなり、対面でのグループを中止し、オンラインのグループに変更しなければならなくなること考えられたからである。会ってみると、1年ぶりに対面で会うことに気付くメンバーもいた。オンラインでPCの画面で顔を見ていたけれど、実際には会えていなかったのだった。2日間のグループを終えた翌日の疲労は、全身、頭も体も疲れているな、という感じで、「そういえば、こんな疲れだった」と疲れの体験を思い出した。オンラインの(オンラインで2日間のグループはとても疲れそうだから、実施していないけれど)何かキリキリした、肩と腰が痛くなる疲れとは違う。オンラインは距離を無くして参加できるメリットはあるけれど、やっぱり早く普通に帰って対面で会いたいと思う体験をした。

対人援助学との出会い(3) P46~

団遊

アソブロックの社長を退任して2カ月が経った。改めて自分は何がしたかったのか、何ができたのかということを客観的に見てみようと思い「アソブロックとはなんだのか」という冊子を作ることにした。創業からこれまでアソブロックに所属してくれたメンバー全員に声をかけ、原稿をもらおうというプロジェクトだ。

やり始めてみると、卒業後もみなとつながっているつもりだったが、連絡先が分からない卒業生も案外いる。卒業生をリストにしてみたものの、抜け漏れがあるのではないかという不安もある。もちろん良い別れができなかった卒業生もいるし、在社期間が1年に満たなかった卒業生もいる。でも、良かったことも良くなかったことも、すべてが今の礎だから、それらを率直に書いてほしいと思い、連絡先を探し出しては依頼を続けている。

果たして何人から原稿が集まるかは分からないが、このような機会がなければ、卒業生に「退任」をわざわざ報告することもないだろうと思ったのも、冊子を作ろうと

思った理由のひとつだ。

この作業が、ひとり探偵ナイトスクープ
のようで、案外楽しい。やり取りをすること
で思い出す出来事もたくさんある。20年
は、やはりそれなりに長い。

テレワークで崩壊する組織 P33～

村本邦子

最終年のプロジェクトは本当に現地開
催できるのか!?と危ぶまれたが、何とかや
れそうだった。8月末のむつはオンラインとなっ
たが、10月に院生をフィールドワークに連
れていくことができた。多賀城、宮古も制
限はありつつ、現地に行けた。そして、もう
すぐ最後の福島となる。やはり、その土地
に身を置き、人々と出会う一期一会が重
要なのだ。11年続けてきたプロジェクトも
これでいったんひと区切りする。

連載も今回で 2019 年度分まで書き終
えた。2020 年度はすべてオンラインとなっ
たので、間もなく現在に追いつくだろう。こ
ちらも間もなくひと区切りだなあ。

周辺からの記憶 ―東日本大震災 家族応援プロジェクト― P155～

國友万裕

僕の母は 83 歳です。先程電話で話した
ら、友達と一泊旅行に行くとのことまで至っ
て元気です。母は若い頃は本当に苦労が
多かった人なのですが、年をとるにつれて
幸せな人生を歩んでいます。終わりよければ、
全てよし。老年になっても幸せでい
れると言うのは素晴らしいことです。



僕も年をとるごとに、尻上がりに幸せに
なっています。10代よりも20代の方がいい、
20代よりも30代の方がいい、30代
よりも40代の方がいい、そして、40代より
も50代の方がいい、そういう人生でした。
でも、いまだに男性問題が認識されない

のが悲しい現実です。徐々にそういう文献
は多くなっているのだけど、それを読むの
が一部の人のため、まだまだ世間の大半
の人は男性問題なんて知らん！という雰
囲気ですからね。

これを知らしめるのが僕のこれからの人
生の課題になるかもしれないです。

男は痛い！ P127～

古川秀明

「アフターコロナの時代」

この原稿を書いている日の午前中に、
中学生が同級生を刺殺したというニュース
があり、勤務している中学でも話題になっ
ていた。これから学校は大変になる。それ
よりもっと大変なのは、被害者、加害者双
方の家族だ。スクールカウンセラーとして
同様の事件をいくつか経験しているので、
今から双方の家族に何が起るのかを想像
するだけで切なくなる。

学校の教科学習以外の「教え」が、アフ
ターコロナの時代には不可欠になるの
ではないだろうか…。

講演会&ライブな日々 P145～

西川友理

白鳳短期大学で保育者養成に、その
他いくつかの場所で社会福祉士など福祉
系専門職養成・および育成に携わってい
ます。

コロナの影響でなかなかスタートされな
かった、保育士養成校協議会による、保
育士養成校の教員を対象とした保育士実
習指導者認定講座が、2022年3月からい
よいよ始まります。保育現場(保育所など)
の実習指導者に向けた講座は数年前から
東京で始まっているようです。私は社会
福祉士の実習指導者講習会のお手伝いを
少しだけさせていただいていることもあり、
保育分野でのこの動きがかなり気にな
っています。何をもち「指導者」とするの
か、何を指導できる人を「指導者」とする
のか、社会福祉士の方もスタート前後、だ
いぶ議論がありました。現在あまり資料が
ないので、保育士実習指導者講座の中身
はまだ把握できていません。でもおそらく、
落ち着くまでにはある程度の時間がかか
るのではないかなあと思っています。今後

の動向に注目しています。

福祉系対人援助職養成の 現場から P92～

坂口伊都

前回から今回にかけて、いろいろな出
来事が起き、まさに激動という感じでした。
自分の中が混乱状態です。

下の子も成人をし、これからの人生をど
う生きようかと考えていたところでしたが、
コロナの影響もあって、将来の選択を迫
れる事態になりました。これは、今動く時
なのだと言われているのだろかなと感じま
した。

家族に相談して、友に相談をして、自分
の中を整理して行動を起こしました。そう
することで筋道ができ、私の将来も見えて
きました。それは、喜ばしい事なのですが、
自分の中が全く落ち着かなくなり、胃まで
痛くなる始末。私の中で何が起きているの
か？と考えていたら、急激な変化に私自
身がついていけずいるのだと気づきました。

そう気づくと、スーッと落ち着きが戻っ
てきました。里親をする時も悩んで悩んで、
よしと気合を入れるまでに時間がかかっ
ていたのだ、その時間が今回はあまりに
も短かったようです。

面倒くさい人間でした私。何をするかに
ついては、次回にお知らせします。

家族と家族幻想 P150～

河岸由里子

【喪中はがき】ここ二日で喪中はがきが
10枚届いた。友人知人からのもので、ど
れも父母、あるいは義父母が亡くなったの
でとのお知らせである。女性が圧倒的に
多く、全員90代である。本当に長寿になっ
たと思う。私の母は行年72歳で亡くなった。
私が40歳になる前のことだ。90歳まで生
きていれば20年近くもの年月があったわ
けだ。もしその時間があつたら、母は何を
しただろう？元気で頭もはつきりしてい
たら、茶道や読書、書道や旅行といった趣
味を楽しんでいただろうか？007の映画を
一緒に見に行ったかもしれないし、いろい
ろな話をしてくれたかもしれない。もっと楽
しい、充実した時間を過ごしていたかなと

思う。

人は誰でもいずれ死ぬ。その時期は人それぞれだ。私自身も明日死ぬかもしれない。では自分自身はどうするか？母が亡くなった年齢に近づいてきて、改めて思う。もしまだこれから20年の時間があるとしたら、何をしたいだろう？まだまだ学びたいだろうか？それとも旅行や趣味だろうか？やりたいことは沢山ある。もうこの年になれば、ある程度好き勝手に何でもやれる。う～ん、悩むなあ。とりあえず、ボケないように注意して、寿命が尽きるまで一日一日を楽しんで過ごしていこう。はがきを見ながら思った。

公認心理師・臨床心理士・北海道

かうんせりんぐるうむ かかし 主宰

ああ、相談業務

P97～

先人の知恵から

P184～

岡崎正明

ようやくコロナが落ち着いた。待ちきれなかった私は、11月早々に家族旅行を計画し、友人から誘われるままに果物狩りなどに出かけた。外食の機会も格段に増えた。

これまでの何もなかった日々を取り戻すかのように、次々とイベントを入れていたが、その集大成(?)として、ついに猫を飼い始めた。



以前から子どもたちには、自分とは異なる種族との同居を味わってほしい。いろんな世界があることを知ってもらいたい。との願望もあり。そんなわけで先日、我が家に黒い仔猫がやってきた。

じつはこれが対人援助マガジンと深い関係があって。なんとこのマガジンの執筆者仲間である、「猫から目線。」の小池さんから、保護猫を譲り受けたのだ。

マガジンに執筆してもうすぐ10年。その間いろんな気づきや出会いや貴重な機会など、様々なものを与えてもらったが、つい

には猫までもらえるとは。

世の中何がどこにつながっていくかわからない。だからこそ面白い。

役場の対人援助論

P134～

大谷多加志

前号からの近況…と考えて思い浮かんだのは以下の2つでした。

①保護猫、飼い猫になる

前号の段階で一時預かりをしていた保護猫を、そのまま我が家で飼うことにしました。これまで動物を飼うなんて一度も考えたことがなかったのですが、思いがけない展開で面白いです。一時預かりは私が提案しましたが、今は家族の方が猫にハマっています。

②ウォシュレット壊れる

数年前に買い替えたトイレのウォシュレットが壊れました。ウォシュレットを作動させてもまともに水が出ず、ノズルからジョロジョロと漏れ出てくる感じです。普段はノズル洗浄のボタンを押すとこんな感じで水が出ていたので、じゃあこの状態でノズル洗浄を押すとどうなるんだろう…と思ってスイッチを押すと…、すごい勢いで水が吹き上がり、トイレが噴水のようにになりました。修理は2～3万円、買い替えは3～4万円ほどかかるということだったので、今回はノズルパーツを購入して自分で交換することにしました。これなら5000円ほどです。YouTubeで似たような機械の取り換え手順を見ながら悪戦苦闘すること1時間。無事に取り換え完了し、ウォシュレット機能も正常に働きました。ドライバーで開けられるものは何でも自分で直すという実家の流儀に、今は感謝です。

発達検査と対人援助学

P141～

馬渡徳子

時の流れは、本当に早いものですね。論文のスケジュール通りに、進捗せずに、歯がゆいことばかり……。あと、何回修正したら、完成に辿り着けるのだろう。

そんな、くさくさしている時に、副指導教官より、社会政策関連学会協議会の主催する「論文・博論をふりかえって～大学院生のためのオンライン講座」をご紹介頂いた。

関西地域の大学院で修士・博士過程を修了された、または修士から博士課程の途上にある方々からの体験談を拝聴し、質疑応答の時間もたっぷりの、実に充実した時間だった。

自分と同じような気付きや躓きを、どのように転換していったか、誰にでも起こりうるメンタルの不調とどのように付き合っていたか、指導教官や学内・学外研究者コミュニティと付き合うコツについても、率直に語って下さった。

そうか、いつでも、やり直せるんだ。恥は、もう、いっぱいかいてきた。

もう、全然、恥ずかしくもない。逆に、やり直すことに気付けた自分を、褒めてやろうと思えてきた。

「さあ、もういっぺん」

団 士郎さんの『家族の練習問題』にあるこのタイトルの話が、お気に入りだ。小学校就学児検診時の講話の際にも、毎年朗読させて頂いている。

当時、大学進学で混とんとしていた息子がいた。いしかわ家族面接を学ぶ会でのワークショップの折に、団さんに、サインをおねだりし、その後息子は受験の御守り代わりにした。

私も、自分に、おきばりやす！



九州に現存する、馬渡小学校のものだそうです。大学院入学祝に弟から頂きました。

馬渡の眼

P166～

団士郎

多忙に日々を過ごしている。でも、するかしなないかを自分で選択できる状況になったので、ストレスはますますない。

やりたいことから順に手を付けるので、能率もきわめて良い。飽きたら気分転換に他の事をする。その中には読書やDVD鑑賞もあるが、これが趣味というのではない。漫画を描いたりzoom講座をしたり、出かけてWSしたり、文字原稿を書き溜めたりと同じレベルのメニューとしてローテー

ションする。

こんな事が可能になったのは「支払いのある作業」と「ない作業」で区別しなくて済むようになったからだ。

出来れば少しは誰かのお役に立つことをして人生の終盤を過ごしたい。こんな事を自分が思うようになるなんて、若い頃には想像も出来なかった。

馬鹿だった時代も懐かしく、そして今を迎えられていることを有り難いと思ったりするのだから、歳をとったものだ。

配偶者を亡くして一年日記(2)

P61～

鶴谷 主一

先日、一年半ぶりに新幹線に乗って沼津から近江八幡のケアハウスにいる母親の面会に行った。電車という交通機関に乗るのも一年半ぶりで、切符の買い方を忘れていないか心配するほどだった。

在来線との連絡が悪いので米原で降りてレンタカーを借りたが、早朝ギリギリで「こだま」に飛び乗ったので米原の駅で何か食べようと思っていたが、駅前のカレースタンドは閉まっている。「何もない！」周辺にもお店らしきものも無いので、車を走らせ屋前に琵琶湖畔のどっかいカインズホームを中心とするショッピングモールの中でやっとマックのハンバーガーにありついた。

帰りは夕方 6 時頃になったが、米原駅のカレースタンドは開いていると見込んで、途中どこにも寄らずに向かったが、当てが外れて閉まったままだった。駅弁を所望したがキオスクですでに売り切れで、ホームの立ち食いうどん屋さんにあるかも…というので急いで行ってみたらやっていた。うどんは無いというのでそばを注文して、最後の一パック乾燥した鰯寿司も一緒に空きっ腹にかき込む。そのあと暖簾をくぐってきたお客さんは「ゴメンナサイ、もう終わっちゃいました」と言われてしまっていた。しみじみ、最後のひと玉だったんだあ…。

一年半ぶりの電車旅行は何もない米原を感じた一日だった。

原町幼稚園 <http://www.haramachi-ki.jp>

メール office@haramachi-ki.jp

インスタ haramachi.k

ツイッター haramachikinder

幼稚園の現場から

P86～

水野スウ

前号、はじめてマガジンを一回お休みしたけど、また戻ってきました。ゆっくり休んで充電するってとても大切で必要なこと、としみじみ実感。

今回は7月に東京のクッキングハウスでお話した「文化と憲法」のレポートを書きました。

マガジン原稿をぎりぎり提出したあと、心は広島へ。去年はコロナで実現できなかった「日本のうたごえ祭典」が、今年は広島で開催されるのです。今回の原稿にも登場した「憲法13条のうた ほかの誰とも」、石川のうたごえ有志の方たちがグループをつくって歌ってくださることになり、その舞台に、なんと私もまぜてもらって一緒に歌います。

今年5月、うたごえ創作講習会へお話の出前に行った時(その報告はマガジン45号の「きもちは、言葉をさがしている」に)、私のほんの数曲しかない歌の中で代表作はなんてったって「ほかの誰とも」！と胸張ってこの歌の話をしたことが「うたごえ新聞」に大きく載り、それを読んだ人が歌のグループをたちあげ、石川のうたごえでこの歌を歌い、広島で歌える推薦をいただき…と、びっくりするような展開です。



10年以上も前につくった憲法の歌が、私を広島まで連れて行ってくれると思うと感無量。あなたもわたしも、その存在はほかの誰ともけつてとりかえることはできないんだよ、というこの歌にこめたメッセージ、広島からせいいっぱい届けてこようと思っています。

きもちは言葉をさがしている

P113

見野 大介

ようやく秋らしい気候に。未だに秋冬の展示会と注文の山との戦いに目処は立た

ず。

のんびりと正月を迎えることが出来る自信が全く無い。

ハチドリ器

P4

脇野 千恵

最近、一段と読書量が増えた。もともと日本文学を専攻していた人間。眠っていた夏目漱石全集を引っ張り出してきた。高学年の頃、父が「吾輩は猫である」を読めと言って渡してくれたのを覚えている。なぜ夏目だったのか？本好きな父であったが、年頃の娘に何がいいか考えなかったのかなと思った。学校の宿題より重い課題を与えられたようで、読み終えるのに毎日が苦痛だったのを覚えている。実は今、漱石全集を目の前にして、少しずつ読み直してみようと思っている。若い頃に触れた感覚とは、また違った感動が得られることを期待して。

こころ日記「ぼちぼち」part II

P248～

中村正

コロナ禍で学生たちがエネルギーを持て余している感じで、「教室から出たい！」という声が強く、ゼミの時間を割いてスポーツの秋を楽しんだ。学部3年生たちのクラスだ。合計3時間ほど体育館で汗を流した。ドッジボール、バレーボール、バドミントン、大縄跳び、バスケ等、体育館でできるものの多くを楽しんだ。今年の3年生は2000年生まれの21歳。昨年と今年はほとんどがオンライン授業となっている学年だ。1年生の時は対面だったので少々可哀想な感じもする。全員、若い！15名のゼミ生と62歳の老教授。ルールを設けた。本気を出さないこと、50%くらいにセーブすること、残りのエネルギーをスポーツの苦手な学生への配慮に使うこと、勝ち負けではなく楽しむこと、遊び力を発揮することだ。これは日頃からグループワークで心がけていることと同じだ。教室ではみえてこない学生たちの別の個性がみえてくる。クラブをしている学生は迫力があるが、アスリートらしくスポーツの苦手な学生への配慮を率先して行う姿が清々しい。老教授にもやさしい。20分に一回は休憩を取るように全体を指示するリーダーシッ

プを発揮する学生もいる。行動的な女子学生は男子よりも機敏に動く。なんと言っても教室でみるよりもみんなの笑顔が多い。声もよくでている。そして最後の20分、エネルギーをセーブしていた体育会系の学生やクラブ経験者を中心にしたガチのバスケット。これは迫力があつた。若い人の成長や発達に関係しているので、人間の見方を広げていく必要を感じたが、自らの体力の衰えも実感した。幾度となく足がもつれて転倒。何力所かの擦り傷、5日たつてもひかない随所の痛み。自分の子どもよりもはるかに若い学生たちというから気持ちには若いつもりだが身体はそうでもないらしい。散歩するくらいがちょうどよいのだろう。

臨床社会学の方法 P21～

千葉晃央

京都の障害者福祉に大きく貢献されたダブディビ・デザインの柗さん。

<https://dabudivi.com/>

今回は、里親さんという生き方を応援し、福祉事業所さんも応援するプロジェクト



「お菓子の定期便 えがおのおやつ」をされています。

[お菓子の定期便【えがおのおやつ】モニター様からのお声をご紹介します | ダブディビ・デザイン - 福祉とビジネスをデザインでつなぎます \(dabudivi.com\)](#)

里親さんにもつながり、

福祉の就労の事業所さんにもつながり、
おいしくて、体にも優しいお菓子を届ける！マジでおいしかった！毎月届く！
そんな夢のようなことを柗さんがしてくださったので手にしたときにうれしくてパチリ。



里親支援をされているキアアセットさんと

<http://kiiasetto.or.jp/>

福祉事業所さんとコラボ！そんな企画、実現って枠を超えていて、さすがです！というところで、千葉も応援コメント！

「私をいつも心配してくれる人がいる、いつ帰っても迎えてくれる場所がある、こんな状況にある子どもたちを増やしたい。

そんな生き方を選んだのが里親さんたちです。

国連の「児童の代替的養護に関する指針」は、生まれた家族等との同居が困難な場合に、替わりに整えられるべき生活環境を示しています。

その中で「3歳未満の児童の代替的養護は家庭を基本とした環境で提供されるべきである」と明言されています。

私たちがができることから、始めたいですね。

家族支援と対人援助 **ちばっち**

chibachi@f2.dion.ne.jp

090-9277-5049

障害者福祉援助論

P16～

サトウタツヤ

立命館大学総合心理学部では卒業論文の追い込み時期になってきた。研究室にあつまって皆でピザを食べながら頑張るとか、そういう雰囲気、今年は作れるのでしょうか？ 昨年のゼミ生達、同じ部屋で黙々とパソコンを売っていた姿が思い起こされます。

対人援助学&心理学の縦横無尽 P108～

鶴野祐介

今回は今年10月に亡くなられた宮城・山元町の民話の語り部、庄司アイさんの

追悼文を書きました。東日本大震災から十年半、震災の記憶を千年後まで語り継ぐことと、民話の力による「心の復興」を目指して走り続けて来られたアイさん、本当にお疲れ様でした。

うたとかたりの対人援助学 P190～

中村 周平

前回、完全に提出することを失念してしまい、短信すらお送りしていませんでした。編集長の団先生、本当に申し訳ありません。以後、このようなことがないようにスケジュール管理を徹底したいと思います。

今年も母校のラグビーチームが全国大会の出場を果たしました。OBとしては、嬉しい限りです。ただ、コロナウイルスがまん延して以降、こういったスポーツを含む集客を行うイベントでは人数制限があり、今年も現地での応援は難しそうです。まだまだ予断を許さない状況ゆえに、自宅からの観戦を考えながら、いつの日かまた現場で応援できることを願っております。

ノーサイド P119

山下桂永子

電話の声と地声がすごく変わる人っていますよね。私はかなり変わるらしく、普段よく話をしている人ですら、気が付かないことが多いです。

数年間一緒にお仕事をさせていただいていた指導主事の先生が、学校の管理職になられて電話をかけてこられたとき、全然私だと気づかずにおられたので、「〇〇先生、山下です、こんにちは」と言ったら本気でびっくりされて、「うわあ！山下さん！声がきれいでびっくりしちゃった！」と言うので、私も少し悪乗りをして「そうなんです、声だけはきれいなんです」と返したら、先生が「本当にそうだねえ！」と言ったのでちょっとすねました。

今回も電話のお話になります。読んでいただければ幸いです。

心理コーディネーターになるために P176～

篠原ユキオ

『隣の庭木』

庭木の紅葉が進んで落ち葉が前の道

路にたくさん落ちるようになり、毎朝の掃除が面倒と、思い切ってほとんどの枝を半日がかりで伐採した。

これで周囲の家にも迷惑かけないで済むと、切り落とした枝葉の後始末をしていたら「アア！お庭の紅葉が綺麗やなあ」と毎日楽しみにしていましたのに…」とこれまでほとんどお付き合いの無かったご近所の老夫婦から相次いで声をかけられた。

「秋にこういう落ち葉が道に舞っているのは風情があって良いもんですよ」とも言われたが、みんながそんな感じ方ではないだろうと思いながら苦笑いで返した。

昨年、次女が引越した家で、向かいの奥さんから落ち葉がうちの庭にたくさん入り込んできてと文句を言われ、昨年はきれいに掃除していたものの今年は思いきって根元から切り倒したら、反対に申し訳なかったと謝りに来たという話を聞いていたので、私も落ち葉問題に累わされたくないと思っただけの行動だったのだが、それぞれに感じ方は違うものだと思ったものである。

昔、ピアノ殺人事件というのがあったが赤ん坊やペットの声もご近所トラブルの元となり、近年は運動会のマイク音や除夜の鐘にもクレームをつける人たちが多いという。確かに『風情』が判らぬ人たちが多くなったという事である。



HITOKOMART
P269～

中島弘美

「今日は僕が支払います」

家族カウンセリングでは、親と子、カップル、あるいは両親など複数の人が面接にやってくる。その日の約90分の話し合いを終えて、次の予約の日時を決めたあと、

カウンセリング料金をいただくのが面接の流れだ。

「僕が支払います」とは、自分が働いて稼いだお給料の中から今回のカウンセリング料金を支払う、そう言って、お金の入った封筒を差し出した。

これまでは親が支払っていたカウンセリングの料金は、働き始めた子ども自身が払うので、事前に準備をしてきたという。親子の表情が誇らしげだった。

「えっ、これは働いたそのお金なの？」

「そうです。初給料です」

「はい、確かに受け取りました」

重みをずっしりと感じた。そして、その封筒は大切に保管した。

カウンセリングのお作法 P40～

竹中 尚文

11月の初旬、妻の母親の五十回忌で東京に出掛けた。今年の2月18日が命日だったけれど、コロナ禍の中を東京まで出掛けることへの躊躇があった。感染者数の減少を見て、東京に出掛けた。ちょうど神戸空港で門徒さんから「今、亡くなりました」と電話をもらった。これから東京に行くところなので、翌朝には帰るので待っていてほしいとお願いした。妻の実家は50年程前に無くなったが、妻には久しぶりの故郷だ。訳があってもう20年近く、故郷には足を踏み入れることがなかった。帰り際に、その住職から「また、お参りに来てください」という言葉が嬉しかった。秋の夕暮れは早い。町を散策することなく宿に急いだ。また来よう。 ◆私は、東京に出掛けると新橋のホテルを予約することが多い。そこは、羽田空港からも便利だし、東京の各地に行くにも便利だからである。今回も妻の故郷への地下鉄の便がよかったので、新橋に泊まることにした。新橋は私に限らず交通至便と感ずる人が多いようで、出張族を狙ったホテルが多い。どこに泊まるかとネットを調べると、ずいぶんと安かった。浮かれて高級ホテルを検索してみたら、高かった。結局、出張族御用達ホテルに落ち着いた。泊まってみると、やはり客は少ない。コロナ禍で出張は減っているのだそう。オンラインで商談を済ませるらしい。コロナ禍が終わっても、オンライン商談は終わりそうにない。オンラインで済ませら

れれば、経費は安くなる。若い人たちから、オンラインでの仕事だから東京の住居を引き払ったという話をよく耳にした。コロナ禍の時代を経て、商談も働き方も変わりそう。 ◆国政選挙があった。変化を望まないという選挙結果だった。今、若い世代は社会変化を望まないようだ。社会現状に大きな不満はないのだから、このままがいいという。その意識は選挙結果と合致する。30年～50年前より、一般の個人所得は減っている。一方で高額所得者が増えたというから、貧富の差が大きくなったようだ。変化を望まなくても、社会はゆっくり変化する。私たちは社会に、変わってほしいこと、変わってほしくないことを求める。変えたいことと変えたくないことも同様である。そのそれぞれを見極める目を持つことが大切である。

路上生活者の個人史 P121

寺田 弘志

接骨院をしていると、いろんな人に巡り会えます。前から一度お目にかかりたかった編集部の大谷さんが訪ねてこられて、訪問記まで書いてくださって、感激しました。そのあたりは本文のほうにも書かせていただきました。

先日は、立命館大学ホッケー部の学生さんが、大学選手権で優勝したことや就職が決まったことを報告しに来てくれました。こういう報告をもらえると、とてもうれしい。ただ、もうすぐ卒業の時期。ちょっとさびしい季節です。

接骨院に心理学を入れてみた

P202～

山口洋典

断らない性格、というか、断れない性格だと常々感じることがあります。それによって首が回らなくなり、かえって周りに迷惑をかけてしまうことも多々あると自認しています。コロナ禍になり、空間的な移動をせぬままに作業や仕事や活動ができるようになったのも、それに拍車をかけているのかもしれませんが。本マガジンの団編集長には、常々お詫びのメールばかりお送りしているのを恥じる日々です。

そんななか、先日、京都芸術大学の大学開学 30 周年・劇場 20 周年記念企画公演として京都芸術劇場「春秋座」で開催された立川志の輔師匠の独演会に参りました。演目は『中村仲蔵』で、東京以外では初となる「仮名手本忠臣蔵のすべて」と掲げ、屏風絵をバックに浮世絵なども織り込んだスライドにより忠臣蔵の 11 段目までの解説を一気に行う「大忠臣蔵」の 2 演目のみという構成でした。看板役者として抜擢された中村仲蔵が、原作では単に山賊として一瞬の登場に終わる斧定九郎を丹念な演出と渾身の演技によって新たな花形へと仕上げた様を、歌舞伎や映画・テレビなどと異なって役者 1 人が演じる話芸ならではの趣向が志の輔師匠によって演じられました。首が回らない、などと自分で蒔いた種で足下がおぼつかなくなってしまうのかのような日々を改めて見つめ直し、丁寧に生き抜いていかねば、と、新型コロナウイルスのオミクロン変異株の拡大を前に思うのでした。



PBLの風と土
P196～

荒木晃子

来年2022年3月13日(日)、奈良県初の「団士郎先生の家族理解ワークショップ」を開催する。世話人は、地元出身の立命館大学院の校友。私はそのお手伝いとして関わっている。開催形式は、対面参加の予定(状況によって変更があるかも)だが、何事もはじめての一步に最も馬力が必要で、世話人の校友は苦労していることだろう。行動制限が解除されたとはいえ、次の第 6 波の報道を耳にするなか、「こんな状況ではできない」ではなく、行動することを選んだ友にエールを送りたい。

また、今年2021年12月19日(日)は、「松江家族理解ワークショップ(島根県)」もオンライン形式で開催される。継続7年目となるこちらの WS も、地元のケアマネ

で看護師の仲間が世話人を務めている。島根県松江市といえば、ご縁のある方は少ないと思うが、参加する山陰地方の援助者たちの“あれこれ”を知る好機でもある。

旅行好きのみなさん、全国の「家族ワークショップを巡る旅」なんて、いかがですか？

生殖医療と家族援助 P100

小池英梨子

対人援助学マガジンの大谷さんご家族が多頭崩壊からの保護猫ピーコの里親さんになってくれました。

さらに岡崎さんご家族が捨て猫だったピノちゃんの里親さんになってくれました！

着々と対人援助学会員に保護猫を譲渡していく楽しみを見いたしている今日の頃です。猫を飼いたいなと思っている方、いきなり飼うのはハードルが高いから一時預かりボランティアをしてみたいな。という方はぜひご一報ください。素敵な保護猫さんをご紹介します！

そうだ、猫に聞いてみよう P179～

両角 晴香

先日 Twitter を眺めていると「私は血縁者しか信じない」というつぶやきを見つけた。配偶者も姻族にあたる人も所詮は他人であり真にわかりあえないというのだ。そういえば、私も新婚当初は似たようなことと思っていたよね。けれど結婚 14 年目の今は、夫や義家族との関係性は曖昧になった。「はるちゃんの体には両角の血が流れているんだから糖尿病には気をつけなさいよ」と義母が言うように、私の右のお腹の中には夫の腎臓がある。それは40年前に義母がお腹の中で育ててくれた腎臓であり両角の DNA が組み込まれている。そんな事情を抱えていると、夫や義家族が血縁かどうかなど曖昧になってくる。今では義母を「ママ」と呼び、実母のようになんでも話す。数日前、夫の寝顔があまりに美しいので隠し撮りをしてしまった話をキュンキュン！というノリで義母にしてみた。義母は「うん」とひと言だけ言って、すぐに話題を変えた。さすがに息子夫婦のそう

いう話は聞いていられなかったか。距離感誤り反省。

夫の腎臓と笑う私 P308～

浦田 雅夫

朝 5 時に起きて暗闇を駅に向かい通勤する。琵琶湖は久々の温水らしいと報。ライフラインを止める水道局職員の「温水」(原作:河林満)が主演、生田斗真にて映画化されるらしい。原稿はいつものように遅滞。申し訳ありません。

社会的養護の新展開 P83～